



2010年2月10日放送

## 漢方頻用処方解説 五苓散①

慶應義塾大学 漢方医学センター 准教授 渡辺 賢治

五苓散の出典は『傷寒論』ならびに『金匱要略』です。太陽病中篇には「太陽病、発汗後、大いに汗出で、胃中乾き、煩躁眠るを得ず、水を飲むを得んと欲する者には、少々与えてこれを飲ましめ、胃気をして和せしむれば則ち癒ゆ。若し浮、小便利せず、微熱、消渴の者は五苓散これを主る」とあります。

太陽病を発汗したところ、表邪は去ったのであるが、汗が多量に出たために、口渇を訴え煩躁して眠れず、水を飲むことを欲するものにはただ水を少しずつあたえて、胃の機能を調和してやるだけで、自然に治って眠れるようになる。もし発汗後、脈が浮で小便不利と微熱があり、口渇のはげしいものは、表に邪が残存し、裏には水飲が停滞しているから、表邪を散ずると同時に、裏の水をさばく必要がある。これが五苓散の主治である、ということになる。

太陽病中篇では、続いて「発汗しおわって、脈浮数、煩渴の者は五苓散これを主る」とあります。この章は、発汗し終わって、脈がなお浮数で、ひどくのどの渴くものは五苓散の主治であるということです。続いて「傷寒汗出でて渴する者は、五苓散これを主る」とあります。

ここまでの三章でわかることは「太陽病の時には病邪を汗とともに出す治療をするのであるが、汗が出すぎてしまい、脱水症状に陥って、小便の出が悪くなってのどが渇いて仕

方がないときには五苓散が行く」ということがわかる。体が脱水状態に陥っているため、水を飲んでも尿が出ないのである。飲んだ水がどこかに消えてしまうようなのでこれを消渴と呼ぶ。後の時代になると糖尿病による多飲・多尿の状態をさして消渴と呼ぶようになりますが、『傷寒論』でいうところの消渴は多飲・尿不利を指します。

その他「中風、発熱すること六七日、解せずして煩し、渴して水を飲まんと欲し、水口に入って吐くものは五苓散これを主る」。この場合の中風は太陽の中風、すなわち軽いものであるが、発熱して六、七日経つのにまだ治らない。普通少陽病に移行するのであるが、この場合表裏の証が混在していて、なんともいやな気持ちがして、喉がひどく渴く。水を飲もうとすると水が口に入るとすぐに吐いてしまう。これを名付けて「水逆」といいます。子供の風邪の際によく見られますが、喉が渴く渴くというので、水を飲ませると飲んですぐに吐いてしまう。吐くとまたのどが渴くので、また飲む。するとまた吐いてしまう。脱水傾向になり、尿が減る。特に乳幼児にはよくみられる症状です。

『傷寒論』にはその他にも条文がありますが、『金匱要略』から一つ紹介したいと思います。『金匱要略』は『傷寒論』と同じく張仲景の本とされていますが、慢性疾患に対する病名別処方集です。痰飲咳嗽病篇にあります。「例えば瘦人、臍下悸あり。涎沫を吐して癩眩す。此れ水なり。五苓散これを主る」がそれです。痩せた人で、臍の下で動悸がして、唾や泡を吐きます。「癩眩」というのはひっくり返るような激しい頭痛を指します。

五苓散の飲み方です。五苓散はその名のごとく散剤です。他には当帰芍薬散、加味逍遙散などがあります。「散」というのは生薬を薬研で粉にしてそれを合わせたものになります。五苓散の方を紹介します。「猪苓、沢瀉、白朮、茯苓、桂枝の五味をついて散にして、白飲を以って和し、方寸匕を服す。日に三服す。多く暖水（すなわち暖かい水）を飲む。汗出でて癒ゆ」とあります。白飲とあるのは重湯です。五苓散の粉末を重湯で飲み、その後暖かい湯を多く飲むとやがて汗が出て尿も出て解熱する、ということです。方寸匕は一寸立方のさじで約2gです。ここでポイントは、体をなるべく温めるようにという注意です。

五苓散は夏の熱中症にも使うことがあります。夏の暑い日にゴルフ場などで軽い熱中症をおこすこともよくありますが、こういう場合に五苓散がいい。しかし冷たい水で飲んで元も子もない。可能であれば重湯があればいいのですが、最低暖かいお湯で飲むようにしてください。これは水逆の場合も同じで、乳幼児の吐き下しの時に、冷たい水を与えても受け付けません。このようなときには少量の暖かいお湯を飲ませることが大事です。

処方構成を見ますと、五苓散は猪苓、沢瀉、朮、茯苓、桂枝の五味から成ります。朮には白朮と蒼朮があります。原典には朮としか記載がなく、どちらかは分かりません。エキス製剤ではどちらを使うものもあります。猪苓、沢瀉、朮、茯苓はいずれも利尿作用のあるものです。利尿というのは単に利尿作用があり、尿として出すというものではありません。体液調整とも言うべきもので、胃腸内に滞った水を去り、尿や汗で余分な水を去ると

いうたぐいのもので。利尿剤との違いは体液が過剰にある時は、それを去るように働くが、体液が不足している時には体液を保持する方に働くことです。これが漢方の妙味ですが、二方向性であることを科学的に証明することは困難でもあります。桂枝は表熱を去り、気の上衝を直し、猪苓、沢瀉、朮、茯苓の利尿作用を助けるものです。散薬ですと桂枝の芳香が心地よく、古くなるに従って臭いが落ちてきます。しかし煎じ薬で服用しても十分に効果があります。

使用目標です。原典からも分かるように、口渇、尿不利が五苓散の目標です。この場合の口渇は口乾とは異なります。口渇は水を沢山飲みたくなることです。口乾は口内が乾燥するけれども水を飲みたいわけではなく、口の中が少し湿ればそれでいい、というものです。瘀血や冷えで来る場合があります、体液が不足しているわけではありません。五苓散の場合は口渇、尿不利ですから、のどが渇いて水を沢山飲むのだけれどもその割には尿の出がよくない、という場合です。もう一つ目標とするのが、「水逆」の症状です。『金匱要略』の条文にもあったように、水を飲むのだけれども、飲んだらすぐに吐いてしまう。ただしあまりムカムカするような吐き気はなく、水が飲めそうな気になって飲んで吐く、ということをして繰り返してしまうような場合です。『傷寒論』では急性疾患に対する応用が書かれていますが、慢性疾患に用いることもあります。

応用です。急性疾患で用いる場合は、子供の感冒によく使用します。発熱、嘔吐、腹痛があった場合に用います。特にのどの渇きがひどい割には尿の出が悪く、水逆の状のある時には五苓散のいい適応になります。下痢を伴うこともあります。嘔吐している状態で五苓散が飲めるか、という疑問も湧いてきます。こんな時に有用なのが五苓散坐薬です。五苓散を練って坐薬を作ります。小児の嘔吐性感冒に有効だという報告が複数ありますが、薬局の理解があり、作ってくれないと使うことができません。

次は頭痛です。水毒による頭痛には第一選択になります。水毒というのは水の変調、偏在によって起こる症状であり、体液の分布障害です。症状としては、めまい、立ちくらみ、頭重感、乗り物酔い、悪心、下痢、浮腫などですが、舌診で舌に歯型がつく「舌歯痕」は特徴的な所見です。頭痛に応用する場合も水毒があることが条件となります。女性の月経前の頭痛は典型的な水毒による頭痛です。女性は高温期にはホルモンの影響で水を貯めこみやすくなり水毒症候を来すことが多く、尿や便の出が悪くなりむくみやすくなります。こうした場合の頭痛に用いるのが五苓散です。

月経不順や月経困難症などの月経のトラブルがあり、水毒症候がある女性には当帰芍薬散を用いますが、この当帰芍薬散にも五苓散の成分のうち、澤瀉、朮、茯苓が入っているのです。